

カラカネイトトンボの生息地・篠路福移湿原再生の取り組み

- *石橋佳明（NPO法人カラカネイトトンボを守る会）
- *新庄久尚（株式会社エコテック）
- *古村えり子（北海道教育大学）
- 綿路昌史（NPO法人カラカネイトトンボを守る会）
- 木村浩二（雪印種苗株式会社）

背景と目的

北海道の石狩川下流域にはかつて総面積 55,000ha となる日本最大の湿原が広がっていた。石狩湿原は美唄、幌向、当別篠津、対雁など複数地域の泥炭地の集合体であり、湿原生のスゲ類やミズゴケ類などが優占する広大なボグを形成していた。明治以降の開発や、1950～1960 年代の農地開発や治水事業に伴い、石狩川流域は日本最大の穀倉地帯へと変貌したが、その一方でかつて存在していた広大な湿原はほぼ消滅し、1983 年には石狩平野に残存する湿原植生は 119 ha とかつての 0.2% にまで激減した。現在では美唄湿原や月ヶ湖湿原などに孤立したわずかな湿原植生が残るのみとなっており、これらの残存する湿原も地下水位の低下等による乾燥化が進行するなど、今後の存続が危ぶまれている。

篠路福移湿原は美唄湿原などと同様、かつての石狩湿原の植生や景観が残されている希少なボグのひとつである。市街地に近接した立地であるにもかかわらず、ホロムイソグなど湿原生のスゲ類やミズゴケ属の群落が残されているほか、準絶滅危惧種である「カラカネイトトンボ」が生息するなど、その重要性、希少性が指摘されてきている。しかし、周辺の埋め立てなどによって湿原面積が 20ha から 5ha へと縮小するなど湿原の消失、劣化が進行しており、湿原環境の保全、再生に向けた取り組みが市民団体や拓北高校理科研究部（2014 年度閉校：現在は旭丘高校生物部が活動継続）などによって実施されてきた。

取り組みの経過

湿原の保全に際しては湿原内の土地所有者が多数で所在が分からないことも多く、保全にむけた土地管理実態の解明などが課題となってきた。また乾燥化の防止に向けた水路のせき止め、水の補給や、環境変化に伴い優占化したヨシの刈り取り等を行っている。そのほか、ナショナルトラスト運動によって買い取った区域での乾燥化が著しいため、湿原から採取した種を大学の温室で処理し、市民団体や地域住民と協働で育苗や周辺環境への移植を行うなど、湿原植物種の保全に向けた試みを行っている（北海道教育大学から費用の一部を地域貢献経費として補助）。今後は住民運動のみならず、行政等とも連携し湿原保全に向けた一層の努力が求められる。



カラカネイトトンボ(成体・体長約 25mm)



篠路福移湿原全景

